

巻 頭 言

“モノ” から “人” への意識転換

取締役

芦 田 劭



当社（富士通テン）が創立されたのが、昭和48年。その10年後の58年に“富士通テン技報”が産声を上げ、更に10年後の23号発行に際して、はからずも巻頭言を担当することになった。

10年一昔といわれるが、二昔20年の間に当社は種々の荒波に遭遇し、年輪を重ね成長してきた。

この間、技術者集団の地道な研鑽と関連部門との協調により、“世界初”、“日本初”、“業界初”といえる商品（モノ）を10指に余る程、世の中へ送り出してきた。

この間の楽しかった思い出は枚挙にいとまがない。まずはくやし涙、うれし涙を流しあった諸氏に対し、この紙面を借りてあらためて感謝申し上げる。

最近の3年間は、当社の歴史の中で最大級の嵐に直面していることは、収益面でも明らかである。

施策の如何が今後の成長の鍵であることはいうまでもない。

しかし、この様な厳しい時期も、一步視点を変え、冷静に現実を直視すれば、またと得難い試練の場である。

このような現実を直視するためには、**キチン**とした調査と分析が絶対条件であり、その結果から課題を明解化させ、徹底した現状否定を行い、今まで忙しさにかまけてやれなかったこと、やり足らなかったことを掘り起こすならば、革新的な解決策が自然と湧き出すものである。

昨年より進めているRT95の狙いもそこにある。このような厳しい時期だからこそ、思い切った自己変革、啓発ができる絶好のチャンスである。

この様な時期における開発という場に於いても観点、視点の変革は不可欠であろう。

新商品の開発、またその根幹を支える新技術、新工法等の開発に際して根底にあるのは人である。

さらに、新しく生み出された“モノ”も買っていただけるのは人であり、その人へうれしさ、楽しさを醸し出し、喜び、満足感を与えるものでなければならない。

要は「人の幸せに繋がるモノでなければならない」といった、開発の基本をかみしめ直す時期ではないだろうか。我々企業人としての諸活動の場で、ややもすると、“モノの価値を高める”という“モノ中心”になりがちな思考からモノの根底にある“人中心”への意識転換が必要ではないだろうか。